

## 幼稚園教育実習生への指導のあり方に関する一考察 ～実習生の不安や悩みを中心に～

### Considering Ways to Coach Kindergarten Teacher Trainees : Focusing on Trainee Anxiety and Distress

大 平 泰 子 開 仁 志

OHIRA Taiko and HIRAKI Hitoshi

#### 目的

保育者の専門性や資質向上に対する社会的要請がますます高まってきているなか、保育者の養成においては、理論や保育技術についての専門的な知識を習得し、子どもをとりまく環境などについても理解することが求められる。また、実践にあたっては、それらの知識を現場の保育実践と統合して体得することが必要となる。仙崎は、実習の目的について、児童・生徒と直接接することで、習得した知識を現場へ適用していく能力を育成し、教員としての能力や適性についての自覚を促すことと述べている<sup>1)</sup>。実際に乳幼児と関わり幼児教育の現場に触れることのできる実習は、学生が体験的理解を深める上で重要な機会といえる。一方で、実習は学生にとって心理的負担の大きいものでもある。実習を有意義な学習の機会とするために、実習の内容のみならず、心理的負担の観点からも検討する必要がある。従来の指導内容に加えて、このような学生の心理的負担にも配慮した実習指導の必要が生じていると考えられる。

1989年に教育職員免許法が改正され、教員の資質向上の一環として、教職課程の必修科目に「実習事前及び事後の指導」が含まれた。これ

以降、教育実習に関して実習生の心理的变化に着目した研究も行われてきている。

教育実習前には、教員養成課程の多くの学生が教育実習に対して不安を感じていることが知られている。実習に関する学生の不安意識について、1年次の実習前には100%の学生が不安を感じている<sup>2)</sup>、9割以上の実習生が活動内容に何らかの不安を抱いている<sup>3)</sup>、などの報告があり、これらの結果は大多数の学生が実習に対して何らかの不安を感じていることを指摘するものである。

このような教育実習に対してごく一般的にみられる心配・不安は、「教育実習不安」として検討されている。教育実習不安に含まれる因子について、大野木ら<sup>4)</sup>は、事前事後指導の授業で教育実習生から得られた反省・感想を整理して「教育実習不安尺度」を作成し、「授業実践力」「児童・生徒関係」「体調」「身だしなみ」の4因子を抽出した。前原ら<sup>5)</sup>は、大野木らの「教育実習不安尺度」に項目を一部追加して測定し、「授業実践」「身だしなみ」「体調」「子どもとの関係」「逃げ腰」の5因子を抽出した。善明ら<sup>6)</sup>は、「教育実習での不安尺度」を作成し、「教科指導に関する不安」、「生徒と

の関係形成に関する不安」、「生徒への指導力に関する不安」、「教師との関係形成に関する不安」の4因子を抽出した。これらの研究は主に小学校、中学校、高校を実習先とする学生を対象として調査したものである。幼児教育に関するものとしては、杉山<sup>7)</sup>が「社会的コミュニケーション」「対園児コミュニケーション」「体調維持」の3因子を、長谷部<sup>8)</sup>が「実習不安感尺度」として「指導」「人間関係」「事前理解」「活動内容」の4因子を構成要因として抽出している。

このような教育実習不安は、教育実習開始前に高まり、実習終了後には有意に低下することが示されている<sup>4, 8, 9, 10)</sup>。これまでに、教育実習不安について、セルフ・エフィカシー<sup>4)</sup>、教育経験<sup>6)</sup>、教職志望度<sup>6)</sup>、職業選択に対する心理的準備状態<sup>5)</sup>などの様々な指標との関連について先行研究において検討されてきた。また、不安の有無が指導案作成や生活の変化など教育実習への適応に影響を及ぼす<sup>11)</sup>、不安の水準が高いほど実習を回避・忌避する感情も強いことが報告されている<sup>8)</sup>。しかし、実習前の不安感の実習後の達成感に影響しないとの指摘もある<sup>7)</sup>。

本研究では、幼稚園教育実習において実習生がどのような不安を経験したのかについて、実習後の質問紙調査から検討する。実習期間中に随時生ずる不安について取り上げ、実習中に実際に生じた不安場面について把握し、実習生の学年による比較や実習の達成感などとの関連についても検討する。教育実習において実習生が抱く不安を明らかにすることによって、今後、より学生の実態に即した実習指導の体制を整えるために有用な情報が得られると考えられる。

## 対象と方法

調査対象は、幼稚園教育実習を終えた本学幼児教育学科学生189名である。内訳は、1年生93名、2年生96名である。

幼稚園教育実習を終了した後に、学生に対して質問紙による調査を行った。実習計画の概要を示した(表1、表2)。1年生(平成20年度入学生)は教育実習Ⅰの終了後に、2年生(平成19年度入学生)は教育実習Ⅱの終了後に調査を実施した。調査の実施時期は、1年生は、2008年10月17日、2年生は2008年10月14日である。授業時間の一部を用いて、記名式にて調査を実施した。

回収率は、1年生では93名中92名(98.9%)、2年生では96名中96名(100.0%)である。

表1 実習計画(平成19年度入学生)

	実習時期	実習名称
1年次 後期	10月～12月 (隔週)	教育実習Ⅰ
	10月(連続)	保育実習Ⅰの1
	2～3月(連続)	保育実習Ⅰの2
2年次 前期	4～6月(隔週)	教育実習Ⅰ
	6～7月(連続)	保育実習Ⅱ orⅢ
	9月(連続)	教育実習Ⅱ

表2 実習計画(平成20年度入学生)

	実習時期	実習名称
1年次 前期	5月～7月 (隔週)	教育実習Ⅰ
	9月(連続)	
1年次 後期	10月(連続)	保育実習Ⅰの1
	2～3月(連続)	保育実習Ⅰの2
2年次 前期	6～7月(連続)	保育実習Ⅱ orⅢ
	9月(連続)	教育実習Ⅱ

幼稚園教育実習に関する質問紙を作成し、幼稚園教育実習における指導内容や実習生の不安などについて調査した。本研究において検討に用いた調査項目は以下のとおりである。幼稚園教育実習における不安、幼稚園教育実習における達成感、幼稚園教育実習における満足感について、「全く感じなかった」「あまり感じなかった」「少し感じた」「とても感じた」の4件法にて回答を求めた。各々の回答に対して0,1,2,3点を付与して得点化した。教職・保育職の志望度について、「全く就きたいと思わない」「あまり就きたいと思わない」「少し就きたいと思う」「とても就きたいと思う」の4件法にて回答を求め、同様に0,1,2,3点と得点化した。また、幼稚園教育実習における不安について自由記述にて回答を求めた。これらの回答について分類した。

なお、統計学的検討においては、5%を基準として統計的に有意と判断した。

## 結果と考察

### 1 担当保育者の経験年数

実習を担当する保育者の経験年数については、未回答8名を除き、「初任（1～5年）」16名（8.9%）、「中堅（5～15年）」104名（57.8%）、「ベテラン（15年以上）」60名（33.3%）であった。

### 2 教育実習不安

幼稚園教育実習における不安について、「全く感じなかった」4名（2.1%）、「あまり感じなかった」34名（18.1%）、「少し感じた」97名（51.6%）、「とても感じた」53名（28.2%）という結果であった。「少し感じた」「とても感じた」との回答を合計すると、幼稚園教育実習において不安を感じたという学生（以下、高不安群）は79.8%を占めた。これまでに言われている

よりもやや低い割合を示したのは、本研究では実習前に抱く不安ではなく、実際に教育実習期間中に不安を抱くことがあったかどうかについて調査していることによると思われる。

学年別にみると、高不安群の比率は1年生では94.6%、2年生では65.6%であり、幼稚園教育実習において不安を感じる学生は、2年生にくらべて1年生のほうが有意に高率であった（Fisherの直接法、 $p<.001$ ）。

不安について、一般的に次のように考えられている。不安とは、漠然とした浮動性の感情であり、実際に危険性が外界に存在するような場合に生起する。このような場合の不安は反応性のものであり、「現実不安」、「健康範囲内の不安」といわれる。そして、このような現実的な不安を感じた場合、通常は現実的な解決によって不安を軽減するか、時間の経過などによって軽減されていく。

教科指導面での不安について、教育経験無群のほうが高不安者が多い<sup>6)</sup>と報告されていることから、2年生で不安群の比率が低下したことについては、学生がこれまでの経験をとおして教育実習において生ずる問題を適切に解決できる能力を培ってきているためと考えられる。

担当保育者の経験年数別にみると、高不安群の比率は「1～5年」では62.5%、「5～15年」では79.8%、「15年以上」では83.3%であり、統計的有意差は認められなかった（ $\chi^2$ 検定、n.s.）。

次に、実習不安について得点化し、学年および担当保育者経験年数を独立変数、不安得点を従属変数として二元配置分散分析を行った。その結果、担当保育者経験年数の主効果、交互作用が有意であった（ $p<.05$ ）。実習生の学年によって、担当保育者経験年数による不安への影響が異なると考えられる。学年ごとに一元配置分散分析を行ったところ、1年生では担当保育

者経験年数の主効果が有意であり ( $p<.01$ )、多重比較から、初任とベテラン、中堅とベテランの間で不安得点に有意な差が認められた (図1)。2年生では担当保育者経験年数による影響は認められなかった。自由記述の回答に、「年配の保育士と上手くやっけていけるのか不安」「先生が忙しくて話しかけにくい」「期待をかけられた」といった回答もあった。経験年数「1～5年」の初任群は人数も多くないため、今回の結果から明言はできないが、幼稚園教育実習に初めてとりくむ1年生では、まず教育実習や幼稚園という現場に慣れることが必要であり、担当保育者の経験年数が短く学生と年齢が近いほうが気楽に臨めるのかもしれない。また、経験年数の長い保育士では、より専門的な指導や助言が可能であると考えられ、まだ経験の浅い1年生では負担に感じるという可能性も考えられる。

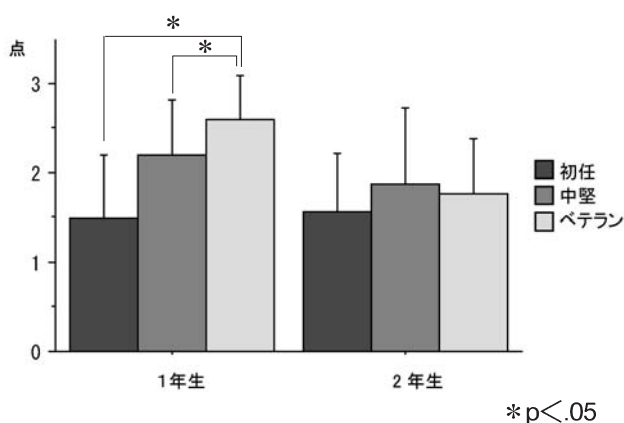


図1 学年および担当保育者経験年数による教育実習の不安得点

### 3 教育実習不安の内容

幼稚園教育実習において学生が感じる不安の内容について、自由記述の記載を分類した (表3)。3人以上から回答が得られた内容について、多い順に示した。それ以外は「その他」として一括した。最も多かったのは、「指導案の

作成・実施」であり、次いで「子どもとの関わり方、声かけなど」「子どもたちをまとめる、全体をみる」と続いた。今回は自由記述による探索的な研究であり、方法論的な違いがあるため直接的に比較はできないが、先行研究で示されてきた内容と類似した項目が多くみられた。また、「保育に関する自身の適性」のように、実習を通して「自分は保育士に向いているのか」など、自身の職業的な適性について考える姿も明らかになった。

不安の内容について学年ごとにみると、1年生では「子どもとの関わり方、声かけなど」が、2年生では「子どもたちをまとめる、全体をみる」が最も多かった。各項目について学年による該当率の差について検討したところ、1年生のほうが該当者が多かった項目は「指導案の作成・実施」「子どもとの関わり方、声かけなど」、2年生のほうが該当者が多かった項目は「子どもたちをまとめる、全体をみる」「担任実習をうまくすすめられるか」であった。1年生では、子どもとの関わり方などどちらかといえば基本的なことから不安を感じているといえる。学生が知識や経験を蓄積してゆくことで、実習において不安を感じる内容も変化してくることがわかる。

### 4 教職・保育職志望度

教職・保育職に就きたいと考えているかについて、未回答2名を除き、「全く就きたいと思わない」0名 (0.0%)、「あまり就きたいと思わない」13名 (7.0%)、「少し就きたいと思う」68名 (36.6%)、「とても就きたいと思う」105名 (56.5%) という結果であった。「少し就きたいと思う」「とても就きたいと思う」との回答を合計すると、教職・保育職を志望している学生 (以下、高志望群) は93.0%を占めた。

学年別にみると、高志望群の比率は1年生では

表3 幼稚園教育実習における不安の分類

幼稚園教育実習における不安の内容	人数(%)	学年		
		1年生 人数(%)	2年生 人数(%)	
指導案の作成・実施	39 (20.7)	26 (28.3)	13 (13.5)	*
子どもとの関わり方、声かけなど	38 (20.2)	34 (37.0)	4 (4.2)	***
子どもたちをまとめる、全体をみる	19 (10.1)	4 (4.3)	15 (15.6)	*
担任実習をうまくすすめられるか	14 (7.4)	2 (2.2)	12 (12.5)	*
子ども同士のケンカや泣いている子どもへの対応	13 (6.9)	9 (9.8)	4 (4.2)	
部分担任をうまくすすめられるか	13 (6.9)	5 (5.4)	8 (8.3)	
手あそび・ピアノなど	10 (5.3)	2 (2.2)	8 (8.3)	
保育者との対人関係	10 (5.3)	3 (3.3)	7 (7.3)	
実習日誌の記載	9 (4.8)	8 (8.7)	1 (1.0)	
保育に関する自身の適性	9 (4.8)	4 (4.3)	5 (5.2)	
子どもと仲良くなる	6 (3.2)	5 (5.4)	1 (1.0)	
状況判断・臨機応変な対応	6 (3.2)	3 (3.3)	3 (3.1)	
研究保育	5 (2.7)	0 (0.0)	5 (5.2)	
積極的に行動すること	4 (2.1)	4 (4.3)	0 (0.0)	
やるべきことが多くて忙しい	4 (2.1)	0 (0.0)	4 (4.2)	
個別援助	3 (1.6)	0 (0.0)	3 (3.1)	
実習中の健康管理	3 (1.6)	2 (2.2)	1 (1.0)	
反省会	3 (1.6)	0 (0.0)	3 (3.1)	
その他	25 (13.3)	13 (14.1)	12 (12.5)	

Fisherの直接法 \*\*\* p&lt;.001 \* p&lt;.05

93.4%、2年生では92.6%であり、統計的有意差は認められなかった（Fisherの直接法、n.s.）。

##### 5 実習教育の達成感について

幼稚園教育実習における達成感について、「全く感じなかった」0名（0.0%）、「あまり感じなかった」5名（2.7%）、「少し感じた」44名（23.4%）、「とても感じた」139名（73.9%）という結果であった。「少し感じた」「とても感じた」との回答を合計すると、幼稚園教育実習にお

いて達成感を得られた学生（以下、高達成群）は93.7%を占めた。

学年別にみると、高達成群の比率は1年生では97.8%、2年生では96.7%であり、統計的有意差は認められなかった（Fisherの直接法、n.s.）。

##### 6 実習教育の満足感について

幼稚園教育実習における満足感について、「全く感じなかった」1名（0.5%）、「あまり感じなかった」12名（6.4%）、「少し感じた」68

名 (36.2%)、「とても感じた」107名 (56.9%)という結果であった。「少し感じた」「とても感じた」との回答を合計すると、幼稚園教育実習において満足感を得られた学生 (以下、高満足群) は93.0%を占めた。

学年別にみると、高満足群の比率は1年生では92.4%、2年生では93.8%であり、統計的有意差は認められなかった (Fisherの直接法、n.s.)。

### 7 教育実習不安と教職志望度、達成感、満足感の関連

教育実習不安と教職志望度、達成度、満足度の得点について、相関を求めた (Pearson's correlation coefficient)。不安は、教職・保育職志望度との間に弱い負の相関が、実習の満足感との間に弱い負の相関が認められた。また、達成感と満足感との間に正の相関が認められた (表4)。

表4 不安、志望度、達成感、満足感の相関

	不安	志望度	達成感	満足感
不安		-.209**	.006	-.272***
志望度			.139	.195**
達成感				.483***
満足感				

\*\* p<.01 \*\*\* p<.001

志望動機が高い者ほど実習に対する不安は低いといえる。しかし、不安の高さと達成感には関連が認められず、不安と満足感には関連が認められたことから、杉山<sup>7)</sup>が述べているのと同様に実習の不安感の実習自体の成果に影響を与えるものではないが、実習に対して満足感を得られたかどうかには影響するといえる。

### まとめ

学生に対して幼稚園教育実習後に質問紙調査を実施した。学年があがって実習の経験を重ねるとともに教育実習における不安は低下する。実習自体に不慣れな1年生では、担当保育者の経験年数が少ないほうが実習における不安は低い。また、教職・保育職志望度が高いほうが、実習に対する不安が低い。不安の高さと実習の達成感は無関係だが、満足感とは関連する。ほとんどの学生は教育実習における不安を感じているが、病的なレベルの不安や実習に支障を及ぼすような著しい不安でなければ、経験を重ねる中で徐々に軽減されていくものと思われ、実習をとおして問題にどのように対応し解決していくかということが重要であろう。教育実習においては、不安を回避せず、現実的に問題の解決を図っていくようにすることで不安は軽減し、達成感や満足感が得られる。実習が学生にとってよい経験になったと感じられれば、また志望動機が高まることも期待される。学年などの要因によって不安を感じる内容は異なることから、実習にあたりこのような現状を踏まえて指導していくことが有用と思われる。

### 文献

- 1) 仙崎 武：「実習」とは何か－教育実習の意義と性格。教職課程講座第8巻教育実習，ぎょうせい，2-18，1990
- 2) 鈴木香奈恵，仲本美央：幼稚園教育実習に関する研究 (1) 実習前の不安感について。埼玉純真女子短期大学研究紀要 21：39-44，2005
- 3) 東 俊一，須賀内貢，村田恵子：施設実習における実習生の目的・課題意識と学習内容に関する研究。保育士養成研究 20：25-40，2003

- 4) 大野木裕明, 宮川充司: 教育実習不安の構造と変化. 教育心理学研究 44: 454-462, 1996
  - 5) 前原武子, 平田幹夫, 小林 稔: 教育実習に対する不安と期待、そして実習のストレスと満足感. 教育実践総合センター紀要 14: 211-224, 2007
  - 6) 善明宣夫, 南本長穂: 教育実習の研究 (I) - 実習生の不安を中心として -. 教職教育研究: 教職教育研究センター紀要 9: 1-10, 2004
  - 7) 杉山喜美恵: 教育実習事前指導のあり方について 2. 教育実習に対する学生の不安要因. 東海女子短期大学紀要 28: 167-177, 2002
  - 8) 長谷部比呂美: 保育実習に関する学生の意識について - 実習不安を中心として -. 淑徳短期大学研究紀要 46: 81-96, 2007
  - 9) 坂田成輝, 音山若穂, 古屋 健: 教育実習生のストレスに関する一研究 - 教育実習ストレスサー尺度の開発 -. 教育心理学研究 47: 335-345, 1999
  - 10) 長谷川順一, 浅野文恵: 学校教育教員養成課程教科教育コース3年次生の教育実習不安 (2) - 専攻教科と専攻以外の小学校教科についての指導案作成と授業の実施 -. 香川大学教育実践総合研究 12: 35-45, 2006
  - 11) 石井眞治, 井上 弥: 教育実習に対する不安が実習生活への適応に及ぼす効果. 広島大学学校教育学部紀要 第I部 11: 39-46, 1988
- (平成20年10月31日受付、平成20年10月31日受理)

